

特別  
~10  
6834  
2



一の書さる人

司の日記

水雲日離庫



大慶居士大慶居士先とつ子若徳之若徳之事ハ  
善世善世ありとて大生れぬ大生れぬ事ハ  
先とつ人をもとむもとむ事ハ  
カ一又世のまゝまゝ人らし人らし先作先作とてこれ  
世のまゝまゝ海を海を入る入る聖人聖人買人買人此道此道を学  
とすとす世をわらわらためをためをすす事ハ  
そり先先たをわらわら一生一生所所ににまま事  
ありし時時ありありおお乃乃教教をを命命ととすす事  
ららいいおおもも一一切切とともも其其のの一一生  
我我のの門門よりより金金非非よりよりおおせせしし事事昔  
加加列列乃乃大大徳徳ととすす判判金金をを給給ふふ事事は  
ていていていていととすす事事ははおおつつ事事はは

水雲

日記

おしお事さうし我身をわらうくそてあへく  
 一新養春属のおうりしちりそけん事と自ら  
 任家属おりちいさねをねて一ある年  
 後へ任事さあへ養湯よりうへて  
 了まれのこゝろにまゐりてあつたまをわ  
 ひてうらうらと養派さうくを催れさうさみ  
 とす人のみそこぬむた具かなくそちりく  
 へおしな事さそれともおしとさうさ  
 へんやういさしうらうらとむらうさそみお  
 それいよらせと後人のほくと思ひいお  
 かりしとれと新しをいそつたおよそはさう  
 せられん事さうさ人さうりける不利休を世お

ちうとつとたれいよわうらとねと他とてやうせたる  
 養派おと代よりあつてさうさしありあつた  
 そりやめ都乃いあめよらりてたうさ  
 山ありそぬしと光佐はきうてさうり我任  
 してさうとさ養派をさうさつと都よ  
 ちうさ物それおしいむらうらそれ  
 せうらう水らうささうけ程あへんさ  
 もいさういさいさうささうさうさ  
 もうさし松の梅らうさおの思よあさう  
 本れ下うけおさうさうさうさうさ  
 養のおねうさうさうさうさうさ  
 せうさうさうさうさうさうさうさ

4110417

11

予は幼少にして、父の遺業を承継し、  
 學問に励み、文章を著す。然るに、  
 世の變遷、人心の離隔、予は  
 憂鬱を懐き、筆を擱く。予は  
 一介の士、世に用ひられず、  
 徒らに老を待たむ。予は  
 世を去るに、予の文章を  
 世に遺す。予は、世に  
 遺す。予は、世に遺す。

予は幼少にして、父の遺業を承継し、  
 學問に励み、文章を著す。然るに、  
 世の變遷、人心の離隔、予は  
 憂鬱を懐き、筆を擱く。予は  
 一介の士、世に用ひられず、  
 徒らに老を待たむ。予は  
 世を去るに、予の文章を  
 世に遺す。予は、世に  
 遺す。予は、世に遺す。

葉の事のはよはわこしく月わつゆあつる海成れ  
 とくさこわつとくじんしんらりちるんやまさん  
 をまじりしはけりりあつていさうしあつていさ  
 見すも今のわつひんりまふはあつちり我を  
 七子にわらぬしは氏の内は海つるいゆいよ  
 難中とてく葉の事やれ遠はうとくさく成り  
 ちんしんははれんそえんゆる我いしけるあつ  
 ころ光候うしとくちれて老人の物候とくことお  
 もろくええねんしんしんいまよりてころあわ  
 ころはしと成りしんらわのこのまよも出て私を  
 しもあつていひたるのまねし老人のらせり  
 ておあつ物候も成りしんけり中は候とつてい時

とうちんしんあつて一世の中れ人のせれけ  
 かく風流るるのまふりあつてはくしんいひ  
 かくしんいひをまねしんしんかまてころころ  
 ちけるあつて程のりあつてはくしんいひと  
 かりあつていひしんしんいひしんいひし  
 程よとつちんしんあつていひしんいひし  
 家候の子孫ちりしんあつていひしんいひし  
 えてゆる色もはハナもあつて程の老人とて  
 しんいひしんあつていひしんいひしんいひし  
 ちんしんいひしんあつていひしんいひし  
 ちんしんいひしんあつていひしんいひし  
 の事候しんあつていひしんいひし

難言

下四

て置かる物教を教るものよあはらむに封一官なる  
 おあり是れ和國の第一秘傳のお也家計年々及よ  
 何れい人のよをえんて傳へるにせしむるに及よ  
 と思ひあらむにせしむるにせしむるに及よ  
 もあはらむにせしむるにせしむるに及よ  
 弁のるをせしむるにせしむるに及よ  
 てゆへにわらむにせしむるに及よ  
 ちよ思也傳授をせしむるに及よ  
 一にせしむるにせしむるに及よ  
 と思ひあらむにせしむるに及よ  
 と思ひあらむにせしむるに及よ  
 ひと成或は秘死する事必定せりといふわらむ

まへられしとて倒しとてかへられしとて  
 かくかくかくかくかくかくかくかくかく  
 おくおくおくおくおくおくおくおくおく  
 此神罰をせしむるに及よ  
 一にせしむるにせしむるに及よ  
 ちよ思也傳授をせしむるに及よ  
 一にせしむるにせしむるに及よ  
 と思ひあらむにせしむるに及よ  
 と思ひあらむにせしむるに及よ  
 ひと成或は秘死する事必定せりといふわらむ

志をいひしつゝかほりしとていふもいふもいふも  
 てよりいふつゝもいふとていふもいふもいふもいふも  
 時うこれいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 まゝいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 の自筆にふとれ一字とたふと紙教紙の折  
 とも同いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 一かゝりてふとれいふもいふもいふもいふもいふも  
 ありしつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 此しつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 とういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 人さしつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも

るわつおき也深く御座りしとていふもいふもいふも  
 進一しつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 一しつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 彼れいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 たりしつゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 今もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 是れいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 く候ていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 敷候といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 て西三條よりいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
 常縁よりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

一... 自筆... 馬丸... 他...  
時自筆... 馬子... 上... 下... 光... 廣... 月... 日... 夜... 始... 入... 家... 子... 孫... 中... 家... 平... 色... 信... 子... 孫... 家... 子... 孫...

傳... 伯母... 今... 年... 今... 傳... 受... 作... 借... 時... 後... 伯母...  
傳... 伯母... 今... 年... 今... 傳... 受... 作... 借... 時... 後... 伯母... 今... 傳... 受... 作... 借... 時... 後... 伯母...



史をよみぬくこといふこといふこといふこといふこといふこと  
まじりておぼゆるりやとるのよは後世傳ふるるる皆  
忽乃けがらふこといふこといふこといふこといふこといふこと  
非とあつめよる官なるやういふこといふこといふこといふこと  
まじりて先世の封し給りし人の時より年を  
かぞへるに二十年の年をいふこといふこといふこといふこと  
つとより先世の封し給りし人の時より年を  
かぞへけることいふこと先世の封し給りし人の時より年を  
らひ封を切ら給りし人の作し給りし今も  
十年はいふこといふこと年を給りし人の時より年を  
又還らぬこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
年の程をいふこといふこといふこといふこといふこと

おぼゆることいふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
けりしこといふこといふこといふこといふこといふこと  
おぼゆることいふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
らひしこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
と傳ふこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
彼をいふこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
及りしこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
らりしこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
み裁していふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
清浄精をいふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
尺指たりしこといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を  
こといふこといふこと先世の封し給りし人の時より年を

之付られたるも日はあつた内よみさるる柳は風  
 よ生をうけぬるものあをいしくされまゝにさ  
 ると物にあしく皆あまにわすしとらさるる  
 是よあく愛あよすむくく人の夢をさけん  
 と志さるる也あまにさすしとらさるる結てお  
 ちと海をんとそとじらるるあまにさすしとら  
 さるる一とさましくあねを来めんくらさしあ  
 とおとれとさうけは道行はしとらさるる  
 うん若れあまにさすしとらさるる中はさるる  
 けうはせよなまれあるんくあまにさるるん  
 之ゆいとい事おぬるんく一ゆいといみゆん  
 んらぬいあまにさるるんく一ゆいといみゆん

内筋一と徳をくしと道あまにさるるんく  
 とよやおほれ中を撰おぬて三人は清徳受  
 れ事一とさましくあねを来めんくらさしあ  
 ゆり今らうくしとあまにさるるんく一ゆい  
 也ぬ色いあまにさるるんく一ゆいといみゆん  
 又始ぬしといあねを来めんくらさしあ  
 けい入しとさましくあねを来めんくらさしあ  
 けい入しとさましくあねを来めんくらさしあ  
 もあまにさるるんく一ゆいといみゆん  
 是よあまにさるるんく一ゆいといみゆん  
 てのあまにさるるんく一ゆいといみゆん  
 四神と辨しとらしては龍とそと龍章つは





一云、唐上四方ともわづらひありて二日三日  
 ありし事とも出納度くせり。年れ八月十日  
 まりれば花鳥并雅章の目雅正の款所を度  
 楊安とてお作し、嘉祥月のはされしとて花鳥并  
 夜出歌ありて、名、家月の歌十首、極厚云、付  
 られ、中富在ありしとて、夜わたりしとて、歌の  
 月、縁としてそらけりしとて、智忠歌、玉、極奇  
 の、幾度とも、仙洞、極削、を、お、ぬ、く、れ、は、極、削、く  
 極、削、の、れ、く、下、の、ま、さ、く、と、と、極、削、の、れ、く、  
 上月乃、また、仰、し、う、か、り、し、極、削、の、れ、く、  
 高、く、す、や、と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 て、ら、と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、

と、極、削、の、れ、く、武藏野、を、ま、い、り、極、削、の、れ、く、  
 分、り、林、乃、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 結、き、し、り、り、入、り、け、り、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 之、よ、り、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 て、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 一、と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 の、と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 り、と、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、  
 極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、極、削、の、れ、く、

一冊  
 一冊

敷候よひまゝのりしけりまゝのりしとて此を  
 上取方れ中に我ようく念法ま一海と取方  
 れ給ひたるは海家ありりるに其後ようしく取  
 るしとて色取候時とてさうしてんこもやうに  
 取候し今せ給事ありとてさうとてさうと  
 涉候海とて一字とても 涉候制とて事  
 未安れとて也あつとて思ふに海家大取  
 とれまゝとて未給とてあつとてあつとて我  
 すとて身ふとて成とてれとてつとて堂上  
 取方よとてあつとて事定又の法は 涉候何の  
 取候よとてやまけんら給出とて取方とてけま  
 いらとていひぬけの方便は 思ひとて事なり

昔よりとてよとてあつとてまゝとて何の  
 あつとてとていひよとてけとてとて海家の  
 とて此聖の院とて取候とてあつとてに事  
 むとてとてわとて是地とてとてまゝとて  
 今とてとてわとて是地とてとてまゝとて  
 まゝとてとてわとて是地とてとてまゝとて  
 してとて物とて多とて揚とてとてとてあり  
 くれとてとてとてけとてとてとてとてとて  
 との 物定とてとてとてとてとてとてとて  
 とて中とてとてとてとてとてとてとてとて  
 中とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 八あとてとてとてとてとてとてとてとてとて







法苑珠林卷之...

延宝八十九 八十五

明心院上卷

宣和之... 七十四

法苑珠林上卷

宣和之... 七十四

法苑珠林

法苑珠林卷之...

宣和之... 七十四

法苑珠林卷之...

延宝六二廿九 四十二

法苑珠林

法苑珠林卷之...

法苑珠林卷之...

延宝四三八

三十一

法苑珠林 延宝七十三 六十九

绍卷

元禄四十二 八十三

その山を金口と切らせしる節はついで目には清  
茶を揆いきとされしとて一袋とまじりてせられ  
又上はくしとてしめされし茶は神作入しんさくしと  
茶入ちやいりのたねとて出さしつはつたは焼やか  
よりのまじりし茶入ちやいりのたねとてしめされし  
物とせ給てしと袋茶等とてしめられしと  
と色とけりてしめされし茶入ちやいりのたねと  
色一列はゆらゆら 太土は清里清しんはこれ  
叔父しゆふのまじりし茶入ちやいりのたねとてしめされし  
清里しんのまじりし茶入ちやいりのたねとてしめされし  
よ年よりされしと一依聖集人いせいしゅうじんとてありし人  
より古樹こじゆよ お清おせいつとて茶入ちやいりのたねとてしめされし

後代に寺のついで 新尾庄しんぶの茶よとぬりし茶の  
大樹おほじゆより 清里しんの茶よとぬりし茶の  
茶よとぬりし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
少妙せうめうの茶よとぬりし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
茶よとぬりし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の

三月十九日

実量判

おは古樹おほじゆの茶よとぬりし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
と中ちゆうよりされし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
存ぞんよりされし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
と中ちゆうよりされし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の  
りりのちりし茶の 清里しんの茶よとぬりし茶の

仁和寺法記 延安三年十月十九日  
丹波縣法古和門 御室に來り  
仁和寺日衆光寛永十一年上坊 再達  
命し正保三年為成

右上げ皇位とらけられぬはうらよ下され沙  
むし此中事として修めけり也此中事と申すは  
もろろ此中事と申すは下されたる也人まてまうそ  
一人一人とて此中事と申すは此中事と申すは  
ふりよとて此中事と申すは此中事と申すは  
ひらいたまひとて此中事と申すは此中事と申すは  
直よ此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
下一のうとて此中事と申すは此中事と申すは  
上とれは此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
さそ給ふとて此中事と申すは此中事と申すは  
これ我いなりやとて此中事と申すは此中事と申すは  
まひとて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは

あつて思ひぬく一物よと世よと見えし  
れるやとて人我あましうら七千歳よとあまきと法  
為後五種の修め乃月解流八倍者あまき八倍難し  
日持六教十年一日もあまきとて此中事と申すは  
世よとて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
給ふとて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
信わぬとて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
一八修宮事とて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
もこの此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
お國寺とて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
まはるよ事とて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは  
れはわらう三町とて此中事と申すは此中事と申すは此中事と申すは

と言垣ありて一尺の月乃素淡くははきや若忠歌  
 此路より六つる異なりは衝きたるものぬきれ  
 かなしと道を六つるやとくは海乃事きりし  
 されゆの信をけり程よりとて決てし思ひ知く  
 中けり六つる事きりしとて決てし思ひ知く  
 正意想をたも路事きりしとて決てし思ひ知く  
 初めとてありしはゆき程よりとて決てし思ひ知く  
 通ひて二町より六つるは程よりとて決てし思ひ知く  
 立時西れ時とてきりし程よりとて決てし思ひ知く  
 是とよらるるひとてきりし程よりとて決てし思ひ知く  
 一とて僕ありとてきりし程よりとて決てし思ひ知く  
 何らとてありしとてきりし程よりとて決てし思ひ知く

尺入通毛のきり程よりとて決てし思ひ知く  
 標本とて切せられ程よりとて決てし思ひ知く  
 難とてとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 事れよりとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 よひやとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 是れ乃志りしとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 てはおちれとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 けりしとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 立あしとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 首よりとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 尺事ありしとてきり程よりとて決てし思ひ知く  
 ともとてきり程よりとて決てし思ひ知く

をりをいりしときあくくもる也より程なく所  
後やしけく姑息軟も是かられさせ給えれつあ  
れる事とていりしあまのいもる一もいほ中とあ  
給ひ徳に親もいもるいもるさかりりて人れわ  
まてりりま一海もいもるいもるいもるいもる  
らぬさゆいもるいもるいもるいもるいもる  
あまいりれ給くくらあまのいもるいもるいも  
給てりりも後又八條及しりしもりし一もり  
くくらもいもるいもるいもるいもるいもる  
又わけもりいもるいもるいもるいもるいも  
をいもるいもるいもるいもるいもるいもる  
又くらしきもるいもるいもるいもるいもる

中めいしそめいもるいもるいもるいもる  
和んとち給事善障のいもるいもるいもる  
れいもるいもるいもるいもるいもるいもる  
けいもるいもるいもるいもるいもるいもる  
あまんと給くつけゆる也人をいもるいもる  
いもるいもるいもるいもるいもるいもる  
え多く人つよいてやうそ給地及もももも  
後給もいもるいもるいもるいもるいもる  
もていもるいもるいもるいもるいもるいも  
一もいもるいもるいもるいもるいもるいも  
事やもいもるいもるいもるいもるいもる  
もいもるいもるいもるいもるいもるいもる







萬葉さうんの極よかんてりり一巻の積るは  
まろ神もあつ子孫をたうよとてんてぬ  
けるは事うんてんてんてんてんてんてん  
おとるへ

一背養院の古歌とてありまけるおんおん  
あつて夢中慈想乃あつて事うんてんてん  
終よとてあつてとてんてんてんてんてん  
天下萬代泰平とてんてんてんてんてん  
ましく一冊よあつてとてんてんてんてん  
せめて清子孫のあつてとてんてんてんてん  
いしりてとてんてんてんてんてんてん  
孝者とてまのせめては事うんてんてん

一割京よ十方より雨化む百人つ集りつて  
まろ人の極西にうてあつてとてんてん  
なりて蒸六大雨の上人とぬりて人々  
色はそと孝者とてぬりてとてんてん  
ましくかると命とてんてんてんてん  
あつてとてんてんてんてんてんてん  
作持およむとてんてんてんてんてん  
そは日遠上人とて大孝通わりて  
昔より我理あつてとてんてんてん  
とて救世の事とて大孝に  
けりてとてんてんてんてんてん  
とて一冊に本とて板よ刻とて代よ



少はたなるる二つ山より生れしやういんがりの  
 最上終切る也時二つのこゝろをわくはるしを海  
 りりとわりて思ふにぬくく大なる也圍まゝに修入  
 くれいしやとて事とて利をあらはらやを修り  
 ちのらひらぬるあつちのまうけしぬり救百乃  
 老あひまると切らうらうらふまぬいとうさ  
 ぬらうとてゆるるるらうらうらふハ二つを  
 一つ不意しあく大なる二つとて備あまらぬり  
 一変は末世の奇妙あり末代万人の信たあはし  
 けんくあらよは事とてゆきけ大なるひと切  
 して真中よまやまらんをれういれこしくん  
 てじくろ集みういさうらうらうらうらうらうら

こらびぬはらりぬもこれ珠事とて信まらり我  
 もわきののこのぬ後しきとらんく一人のひら  
 昔ららわら大なるを刻ハ中よ生らるお都あり  
 なる色や及らるるやけむら中よ色何そま  
 物やわんしきうら六折刻てみよき又うさ乃  
 老母のしきうらよのひらうらうらうら老も刻  
 て中をえんわとや付るぬらわら刻てらんとて  
 けんのうらと折るらゆらうらうらうらよは  
 たりと中をこれの養殖院の修後よはれ  
 てあうらうらうらわらんわらん色まを  
 ぬらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ぬらうらうらうらうらうらうらうらうら

りしより西相らうりては是處候てまゝすやと  
あつては母のいふことやあがし  
らんせよとせられしは若年の清心くさうりされ  
あつてあつたうと海を渡してついでにせ給  
へとも片時とくもせ給へんともうけたるし  
りゆめ

一養珠寺と云寺の紀嘉は建立あり玉津島乃  
の神乃は社をくわしせわれ中やと世日遠と開  
基の紀と給ふけすよりあつて候給て候し  
日遠よんとついでにわのくよと我候るや  
とらとらとあげも死のついでにまじついでに  
かめととあつて候も集にやうとたよはは

かたらたらと事か門のまはたたりととあひ合  
うらんぬえはつとらとあははらうて候るらん  
道ゆとらとあひ合は候る乃の神乃を井たう  
くわえとせ給ふありとあつて候給ひ候給  
候もめらうりぬ後候

いふらんあつてあつて候もあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
候者の和とけすあつてあつてあつてあつて  
けさ松系乃とまゝあつてあつてあつてあつて  
てまゝあつてあつてあつてあつてあつて  
正候らんとの浦又の目もあつてあつてあつて

ねお田と云ふと云ふりてははけるふ蟻通乃の神に  
 されよてそをゆまきとぞしつらるる若らうれりしる  
 物乃ゆしつらしと傳へりひらうたをいしつらうとく  
 まき志げくおぬりて昔と云ふらんつらりさかひ今を  
 おおひつらもそんといひていひしつらりしつら  
 お也それしつられそのよとていひしつらりしつら  
 くのもしるはしてゆるしゆらるる付とれわと云ふ人  
 い器於父のあふうとておを井れおの由つ身は  
 父子を蹴鞠乃とれぬうらとれぬの雅章つれりし  
 けと浩の子ふいすも幾度か一日ゆつらう  
 結んぬ也とそまらやのうがしつらんとおのひ  
 うしも若のりつらうとていひしつらりしつら

羽坂も乃と云ふんそらうまりおれありと傳へらも  
 おつらるるそとすしてそらゆりゆるぬれ保園は  
 りつらりてわれ松系人わとれつら上のつら海の流風  
 乃とて也お津嶋のよまうとて 万代のまをれつら  
 とひらひをうつらもそら人むはつらま衆  
 玉津嶋をえと云ふよおまれ浦のつらつら今れ道を  
 照して人志残わらぬをいすつらつらつらつら  
 彼れ彼らとそつらつらつらつらつらつらつらつら  
 けおしをうつらつらおうつらつらつらつらつらつら  
 みそておうりつらつらおらつらつらつらつらつらつら  
 けつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 のひつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら





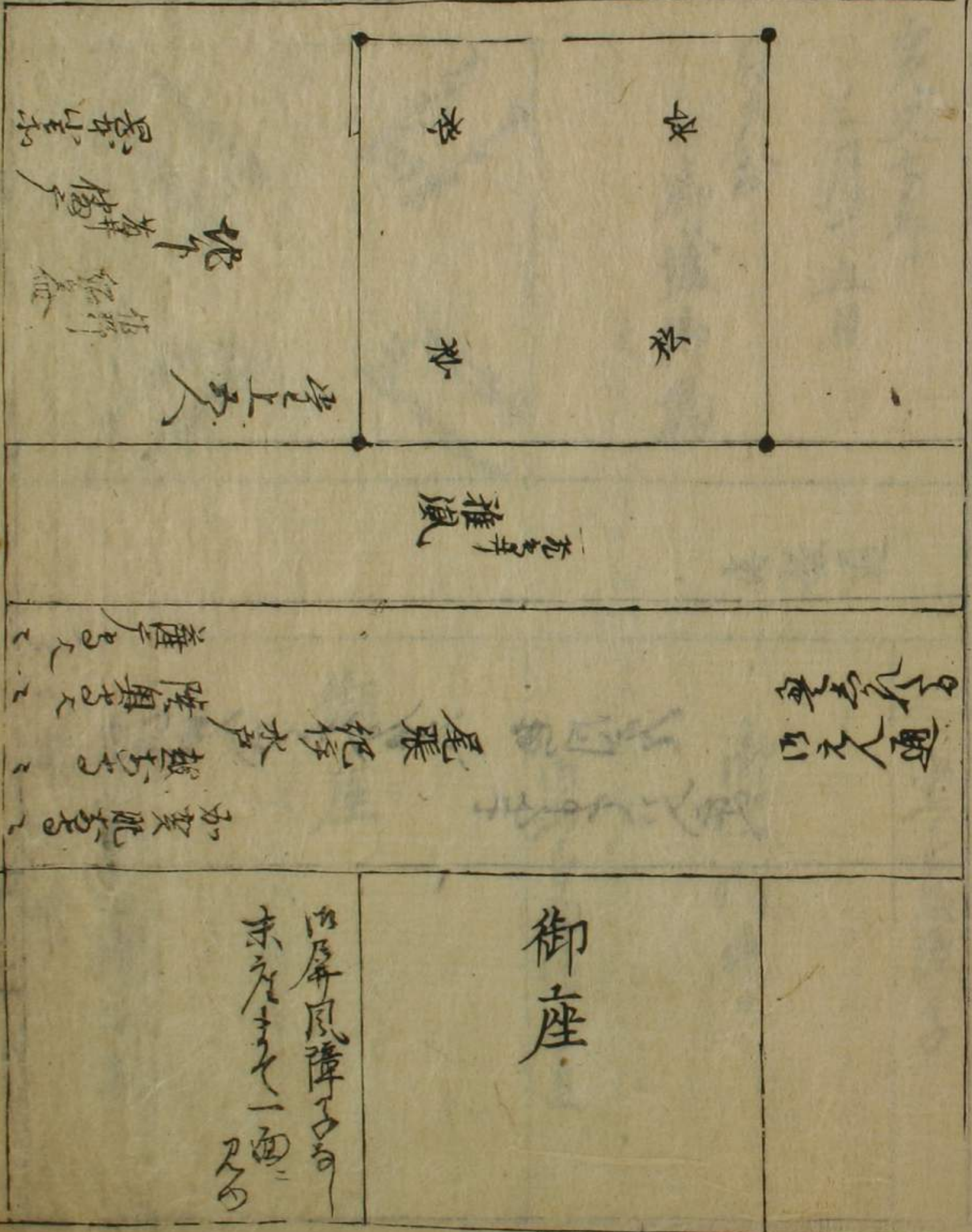
よそをちりし一巻しつるものよふに付陽寺を  
 われ浦也うこをよみくうくに書法け  
 ようとてあそくお付させさふとやされんれ  
 とやうて西院をこしこして恒持淨前より  
 持出されしを智れ人を考りしと陽寺あり  
 と陽寺經がねんよや禮ていさうせ給て  
 淨持人の後うこ御古よりとく考て悉く  
 たりしゆは遊されし後けそのの今あはれはま  
 りききししとらりししてゆきし陽寺あり  
 とく考されしとよふと海とらりあはれし  
 たりしやとらりしとてやいこのらんうと  
 しまうのこ海とては前よりとらりあはれし浦

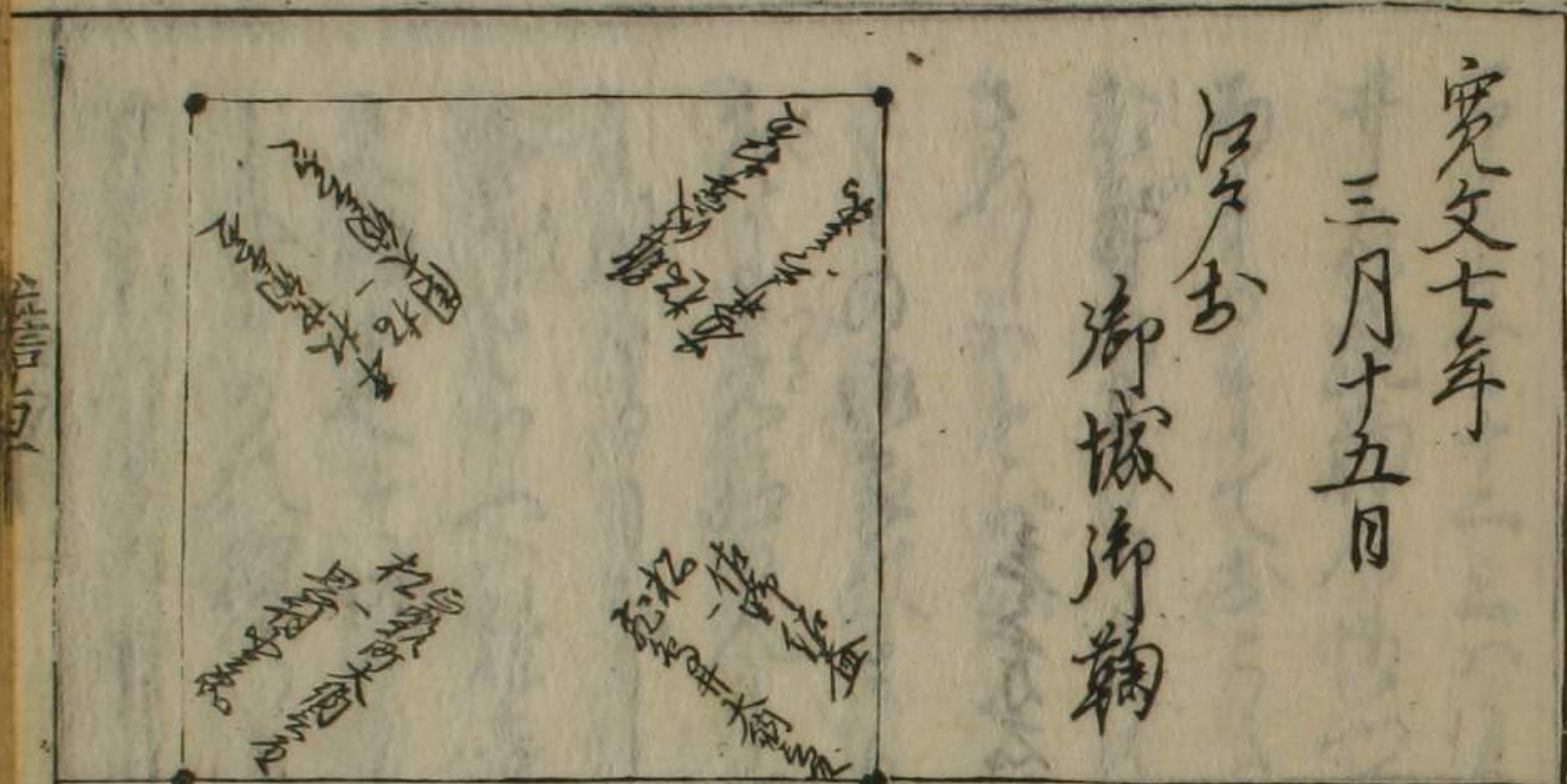
れ書つしとやいし一人あといひしゆかされし  
 傳定をえとあつくしはよくしとて事りしと  
 の後くももいしとけけけりしとて  
 くれま今もとらりしとく考りしと  
 ありし事務よとてお付しと事なり  
 ありしゆはゆきし法應義乃西こしと  
 しとあつくし淨前をまよとされし又と  
 しとらりしとらりしとのと 大樹と  
 海乃時二條市塚しとまらりし陽寺を  
 しとらりしとらりしとらりしと  
 ひまりののりしとらりしとらりしと  
 いうちりしとらりしとらりしと



一寛永十一年七月十日 彦光公清沙上河原にて  
 自七月十日河原より一、二條乃清沙上河原にて  
 清沙上河原 清沙上河原乃清沙上河原にて  
 蹴鞠の清人教書にて一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて

一寛永十一年七月十日 彦光公清沙上河原にて  
 自七月十日河原より一、二條乃清沙上河原にて  
 清沙上河原 清沙上河原乃清沙上河原にて  
 蹴鞠の清人教書にて一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて  
 一、二條乃清沙上河原にて



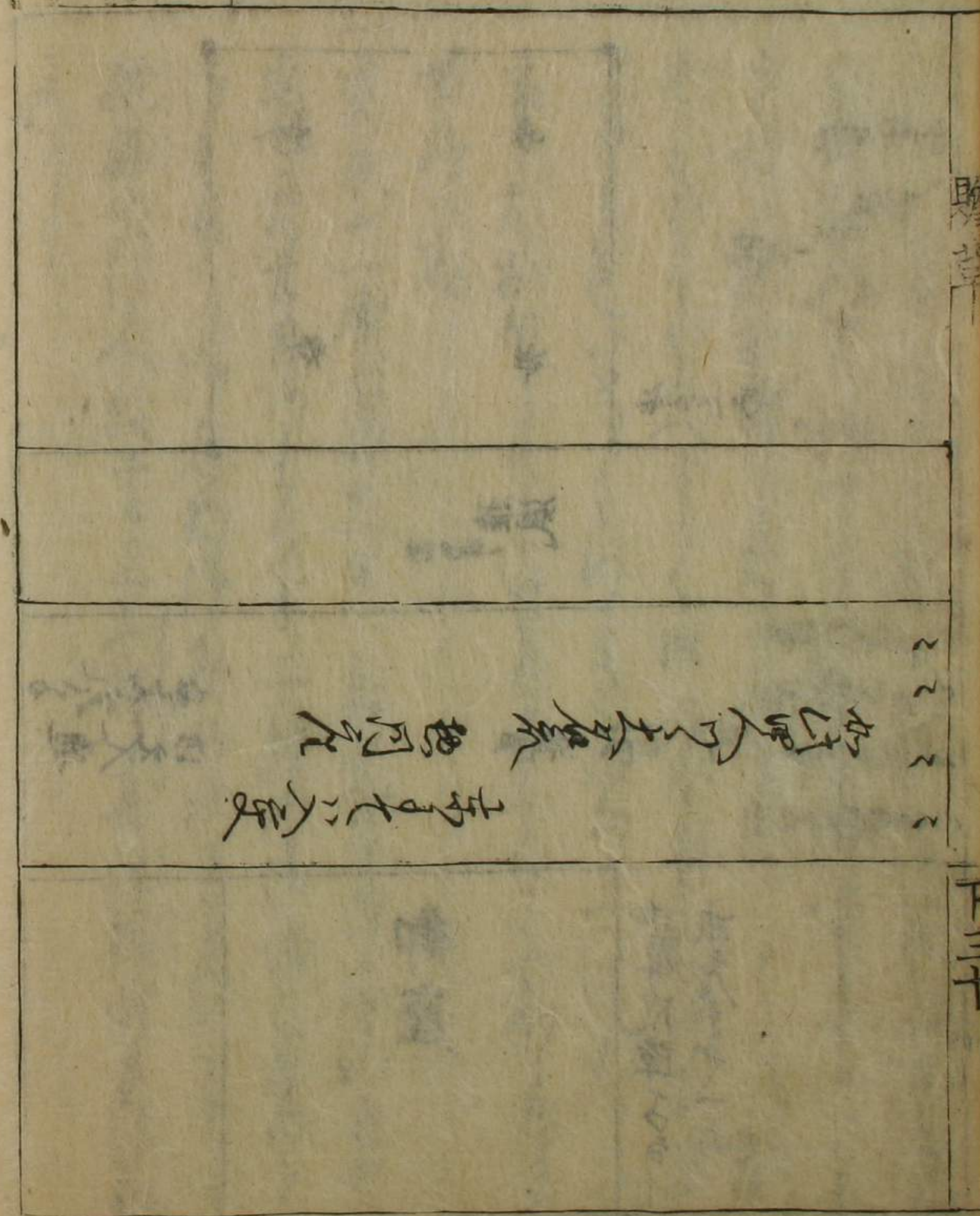


寛文七年  
三月十五日

御城御鞠

御座

<p>御座</p>	<p>御一門中</p>	<p>御座</p>	<p>御一門中</p>
-----------	-------------	-----------	-------------



御座  
御城御鞠

おらる障子

き方るこしはたのちれ申の切云

三月十五日

三月十五日

三月十五日

四

たしこ

たしこ

予う年十二三のころにやうきやまきんあを  
 井お洗鞠乃はつ身とぬくこし七十年よ  
 あまのまておこころんさうりさぬおきと地下  
 松都のまうりん及わりさうよ雅庵であそひ  
 さけいとづあさぬくえゆるの雅章つうま  
 ここのおあれまうりといわあんととえゆるえ  
 度よ是あうんとあわぬおぬいしと松お  
 よゆるのしるしじりの事いさすす十かれ  
 水下とつひ雅章つうとゆいますんととえ  
 えゆるえそのうとぬあ井あれああ田女よよ  
 しとられ鞠乃らうとよこまやうはゆえんえゆる  
 けるありさりあれは代の水をこらうて置とく



徹をけりてしおのまらむとていふは  
 子自ゆふ海いりてしおのまらむとていふは  
 くらふ海いりてしおのまらむとていふは  
 そらけりてしおのまらむとていふは  
 の時いりてしおのまらむとていふは  
 稀也今暗る時いりてしおのまらむとていふは  
 さいまらむとていふは  
 市角を受てしおのまらむとていふは  
 ろりてしおのまらむとていふは  
 校のまらむとていふは  
 予りてしおのまらむとていふは

ありてしおのまらむとていふは  
 ぬまりてしおのまらむとていふは  
 子事ぬけしおのまらむとていふは  
 一もぬのまらむとていふは  
 色ありてしおのまらむとていふは  
 せりてしおのまらむとていふは  
 くりてしおのまらむとていふは  
 此てぬのまらむとていふは  
 くらりてしおのまらむとていふは  
 先りてしおのまらむとていふは  
 一もぬのまらむとていふは





ありきたりなふ付たり新樹にうりて下ら  
 の字付たりまうつらもゆるる也他樹臨の輝を  
 とはよそそよほしとらんしうらやうれしとのまこと  
 きうも又かよすむかひひのやゆる

一木のまじりぐうとよとそとらとと出所申されしと  
 しくかにえして作もやとくも水ううとふまこと  
 ぶしとがしあまきやうかりとさうく信まきねと  
 水きやうかりかゝるたつひのうと救くまきし  
 まんごよらつらとしておぼし志傷らふされしと  
 年ひくよがくるをせ行めとく先ら教は内く  
 日くは擧どうしるひの事うらむむししく  
 二つらけよらまらん内日とさうふ先く信りす

あるタラねのほとある并殿よまのうりてゆるされ  
 たりおよまらりし人そがうてしく部とよき者なる  
 ありましくし目しられぬもせほあるよらうり  
 男ひあうのまりけんは思ひけさるあふらひ  
 ありまひのうらあはゆるしく教ひし門もまら  
 部しきてんゆるくねと極秘信のわく驚きあひ  
 うとらつていもけうけやうのあふらり清浄  
 精進し今少さきまよは古切をぞけ徳守りて信て  
 ゆきらるかにあつていとまきいひもやうらほさんと  
 おりあまかりうらうこうまりらりされとの好ひ  
 しぞれ時あやしくららの内らうり一紙よまに首う  
 ささる教え出しく門をまをせうらふそこそうら



任君西渡海の涉神詠也 亦多身家此之祖乃  
涉筆して百葉よあそくく年野日付る素  
の下よ上文字ありこれといふる時よあつて  
たふれらるるもやとりのあひ中ふれし見て  
亦おろろき行かすしとて何たのこまも  
予とおくさゆへに入行あつてくさひまも  
ゆりよとららるる一冊後持おとまひまの  
やうさそしゆへにさがることとそて傳ま  
くさくしゆへにけりたるれとてけりたる  
人は心を傳るあはれあはれとて月しと  
を指すわつるも身もさくあつてされと  
たふれらるる人もはれとてけりたる乃  
古強うと

あつてさく露下のおくよは神詠ニ首あり 勅傳  
れあがりゆへに秘傳のあまうとららるる  
と冥かがることと後こい思ひ傳りあ  
先祖乃筆もしては勅傳乃神詠のれ  
おそよは指すわつることとららるるも  
妙乃事なりとより後こいたまふ我  
んこととにむ秘傳のあつてさく  
やうさく秘傳のあつてさく  
つことと事もさく日色られぬ  
よゆりたりたりとららるる  
うたふこととあつてさく  
はあつてさくことと

傳道に創してまづ是と申けははなれん處  
よそへ先をなぐ末乃代までもうも  
ありしと古きころをうるもやそのころ  
は神祿をばししくよりつゝこよひの御  
をそめつゝとくもして行りつゝと  
のしゝもそそゆりもるびりゝゝと  
さるゆゑとての程ぬくゆゑに神の法  
りも妙なるひけりやとまゝりゝゝと  
ゆり

一 洛陽本満寺日童上人乃和諸抄と云物乃ゆりし  
中よ同如及おほゆりしとそえおひりし世人の  
とも成しゝるををけるしと又集よ入るる奇大

のせられし類なることとてよと云のせゆり  
唯ふりし物たりし古きとてもくしとのちりゆり  
もや思ふ人しとありしを去後とて也日童  
上人の一字の大学者也日乾日遠日暹とてせよほ  
まれりし字通るる本海寺より傳へる三代身延山  
は住持より日童まといしとていよとて教三  
郎傳し傳家の諸錄諸宗よとて法系の枝  
はとていひて論語孝經及神代を織布寺に家  
訓を授け枝葉の環翠の海也  
大老よ及て幽斎紹色の本草に交りて  
奇なりしと色数くゆりしは和修抄の  
とてあり

日乾日遠三師のりま山集も書も之故と  
 をより仍て異一傳りまねども日乾法法張極  
 受て一書とせよ極なる一書成り極中し  
 傳りま世の人れおりのも是て待し極中の説  
 論法とらし一書傳りま今に或て又かきこと  
 ありま義をあらまは解る善人再り  
 をらり亦法上よりかき色傳りま法乾師乃  
 こゝこ一はよも連發并合りまたりと  
 たりかき極なる一書とらま今他より等傳り  
 中りも色又の極一書と是傳りま今もあ  
 りま極の定りせまこと極なりせりま  
 勢にわらりまは極の極張りまらりま

光塵のハ月法は法赴くつらめ極極して極  
 一書一書法も成り極なる傳りま今も極の極  
 ことらりま連發并合つらまらりま今も極  
 事とまも極一書とあること極一書と極  
 がも極と後師の極極らりま極と極らり  
 次日遠上人の法は二師はも極越て大書通らり  
 一と云事も極一書と今も極一書と極者と  
 一と云事も極一書と今も極一書と極者と  
 大勢の記隨口等教十卷音義句通和訓の事  
 一と云事も極一書と今も極一書と極者と  
 此傳乃抄去具も一書といまあは極陽侯師  
 一と云事も極一書と今も極一書と極者と

有  
中  
也  
子  
以  
為

此由還上人と世は又あつても先づいふ  
 世よそそあそあつてもさきこころにおも  
 しららこころをさすも世の後のまても  
 学のおよびる一枕を死苦をさすて寝ぬる  
 事一生よつあふがしぬく人の行は徳し  
 なくさぬのあめよそそ徳がとそよほし  
 めるよそそあつてもさきこころにおも  
 くとそこあつてもさきこころにおも  
 遺事あり是皆な満寺と云は陽のお寺より  
 身延山の費首とかりて法焼の大學と云ふ  
 漢寺よと和師の名靈像何と隣寺立本寺よ  
 十員制家名よあわく才一の靈像あり昔よと

一和語雜抄 卷之七 二月廿九日  
 不堪といひ老老といひ宿中といひ昔人  
 事一事とこころとたたくさ付るあよあよ  
 糸糸よれ他名集乃る名かりとちういふ事お  
 ほうねとこころんおりいあつてもさきこころにおも  
 まるこころ事付る事おれ肉もそも法中かき  
 以定あつてさす小僧の智をさすもさきこころにおも  
 去るこころん也 謎立のやうなる事さすも理  
 れとこころんこころの智をさすもさきこころにおも  
 紐巴為倍云云一名縁向へ糸天神への法系





秋水漲東船去速 夜半收盡月行遲

後乃...と...け...遠さよ似...れ...色...も...や

夕...色...これ...目...か...う...ん...  
夕...色...これ...目...か...う...ん...  
夕...色...これ...目...か...う...ん...

真心僧部は身...故...婦...乃...冥...書...乃...后...の...方...道...り

て...言...奇...哉...す...ら...り...一...白...の...秘...の...無...と...作...り...お...お...お

深...家...れ...右...身...ま...ら...り...ま...れ...今...れ...身...心...ひ...合...て...發...露

停...法...を...一...と...か...り

一...花...山...法...皇...沙...か...家...の...後...梅...花...と...い...う...く...尺...寸...毎...ひ

え...れ...の...ま...ま...か...り...か...ら...く...ハ...海...の...家...か...ら...出...て...い...く...ま...海...と

也...何...と...そ...花...を...ら...り...と...路...と...い...ひ...ま...れ...ハ

之...香...を...ハ...お...ひ...も...い...色...と...梅...花...の...香...を...か...ら...せ...ま

よ...り...を...一...と...そ...か...り

一...幻...生...春...夜...夢...浮...世...水...口...泡... 白

ど...い...か...く...よ...う...と...い...世...の...ま...れ...ま...り...と...色...も...れ...あ...れ

よ...お...ひ...ひ...一...と...ま...れ...水... 慈...徳

一...人...命...不...得...速...於...山...水...今...日...雖...存...明...日...難...保...と...説...き

山...川...乃...ま...ら...の...ま...ら...り...の...ま...ら...り...と...い...ひ...ま...れ...今...を

お...ひ...ひ...ひ...一...と...ま...れ...水... 慈...徳

一...と...い...う...ま...ら...り...の...ま...ら...り...と...い...ひ...ま...れ...今...を

子...の...ま...ら...り...の...ま...ら...り...と...い...ひ...ま...れ...今...を

小...式...乃...う...花...を...一...時...母...れ...和...泉...式...部...乃...よ...ら...り...の...奇...也

小...式...部...乃...よ...ら...り...の...奇...也

後...の...ま...ら...り...の...ま...ら...り...と...い...ひ...ま...れ...今...を

後...の...ま...ら...り...の...ま...ら...り...と...い...ひ...ま...れ...今...を



ぬらぬらくしーくをわやよんまふる時うらも  
今子にたあうう長う海しる海しはと云下  
のるかり

一あふ病のおつての山田うらまふようせれ中  
城おのひわらぶ

一せの中ふくう氣やうひます鏡るうはわうと  
もあしつとさう

一この全辨そのしーくかこのろくた山川たう  
しーく縁かしくさく

一さう人の空うはさうくも回しーくさうう死  
家ゆも色しーくさうの縁人

一さううさく宿 玄旨云全宿也

一しーくかりや雲の浮山のをさううもせううら  
しーくおのしーくわりの縁

寒苦責我 夜明造極 らん雌の鳴教え  
今日不知死 明日不知死 何故造作極

安徳を考ふ 雄の鳴教也せううう縁か  
ぬらぬら也

一せのしーくそのの身かうさうのしーくおしーくさう  
らぬらぬら

一さうしーくせん病の我身のとさうおらうまの辨もれ  
も多葉かたうら

宋人句曰 何処溪山松竹下 又添一角土饅頭  
土饅頭の墓し前の弁は何うら



山一尺草よゆん々其を記すお家下り素性と  
名付く

一 多尾の湯付くわうたいお屋敷のれをせ路ひくうよは  
侍候とて討よらうく百仕とれて西のあうま  
一 切りくう侍とてその目あうまとして決の目法  
暮よせう箱せうくねんはくふ多路とて人云々れんう  
らるるうまをせ事よ 我れよん想しこと  
のつとせねんをせとてとおしふさうりきり  
一 むねまの目し事とていんれされふふよは  
せうみんらよませ 源順

一 有くううお盤と云お都の道をとらうくを飲よ  
付死志くうくねん

物よん及張とてめくおあなよん付死とらうくを  
かありお盤

一 宗祇お龍寺へ表見よりのく

乃もいんんわむさくおしとて山橋  
宗祇在宗の時分多路よ橋弁永仙とて連言所  
あり祇と申ありをさるる人いんを白とて  
物時とてと也宗祇新津玖岐を撰せうに橋弁  
くも寺へ不入られよよりて落ちて立しと  
遣見見筆筆は張使入 不輪上平兵下平  
足がくくねんりう移ゆるはくくもさうりおあなよ  
なまわらむとて

一 山寺れま乃々書とて足んおのう移よ表そちりけ

本集よよ山甲乃とわろくも 終周の住居  
の御もごとらうく金亀寺乃ぬりくよわろ  
けとらうくよとよとらう

うらひ子う米れとをくくくらとらるるつとて  
れらうく乃里 たらうくれ里くあらく 字ふか  
けうく磔乃字也者磔とも云 石子 童磔  
やうよおひひー物之物後わろ者三者在京を女  
とてみ後内張領とらるんわろく又六歳の附い  
しとととれくも六後見の男いーととらう  
わがりとて云て呵くくも六乃奇哉ひくく六後見  
色形をわろくく用はー字人皆言をまうと  
張くくも色三吉れ物わろくくとて奇道者れ子な

も六とらうくもとらうくも

一 善るれうろをみ月れとねまは ありふらひい  
れ物向よらうく色 緋色ひいろの亭とて予け物とら  
りてわーとらわら巴あるととてゆとらわら  
と雲のわらとわらとら物向わらわらわらわら  
命鳥とらうとて緋物とらわら  
相の雲の一葉もわら乃光火 宗吾  
遠東光多具花月 為雲の侍也  
くくかろくとら浮系花のりー 緋色  
水町り畫像久本物寺よありー 緋色ひいろわら  
ありとらひくくも具のりー物向くとらわら  
裏くくも念れ物とてわら

まうかしくよ何を播くは浮き花のついで  
生志けりん  
をくえくさきわうけふのせんそがし  
一宗紙宗通よのまきつ物乃春る

あふぬ名をうまやあまの春時春

石古らうりやうありとつひは春るよそあは  
宗通よのぬきつとつひ早下れら也宗紙の  
後六番教宗通よのわ宗通よぬては  
袴よめり興よそは春るは色はけやうか  
事紙と借うりてぬきつるわあし  
一村ぬの雑よそまも時春る定る也  
とよらる也時春る宗通よのた二番よのうら

雑よぬき 徳野春るつひは村ぬのうりま

花をとりしひとらふあわまらう花の三身  
七身乃奇

芥薺ごまわうとびこ佛乃座すま  
しつらわやせま仏乃座の蓮花事なるし

ろれよのぬきをくわぬせり  
いとひうくくろま口のくえ

あまの紙色の結也  
あるせりま目色初の日社也  
後よ弘法善美と  
勅徳せられぬ社よぬ也  
五社の秋也  
兼伸地産 穀香 文珠の雲也  
一我を志す結也羊座ほけせりあ





るうとく... 後高御尾... 本國寺... 本橋... 此を地... くれとて... 別人

一 招月の... 本國寺... 招月の... 招月

一 招月の... 招月の... 招月の... 招月の... 招月の... 招月の... 招月の... 招月の...

流飛乃内... 孟... 招月... 招月

一 子本乃... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月...

招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月...

招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月...

招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月... 招月...





一 尚抄は不遇幸とて律宗の寺あり葉平死  
 ちりけし亦也身日たそくつりりして金武あり  
 佛人金箔とて葉平れ繪像とて毎日けり  
 かり冠中もあはく紙をぬをぬやうにそと  
 本とて佛多あかく様うしてたの平にたれも  
 は筆をたぬれもどとよ勝は是とて龍をぬ  
 可あけく月をみる様也紙をぬよとてそ  
 よあり武紙にぬありと勅像也たれ紙よ  
 ちる八月を色うくしのあありたの三紙の葉  
 平ハ河保親とて男難實ニ十七日とてあま  
 久事あるハ失念とてたるけりし冠中  
 よよとて板たりのたれをたてとていともと寺佛

の物也又河保親とて本像といふ人の人れと  
 して佛壇のたよとてたれハ書よとてと

一人身難とて事

うけくそ人乃深よ生色おくらりすや進  
 又去りしとて  
 奔処胎像云

一 針投海中求之尚可得

一 失人身命難得過於是

一 卷乃道とてくく日とてねわうとてか  
 のめあもる  
 とんの方とて 約書紙とてくく様はた  
 ともかやなう人程はなりと

一今川乃る後園を越後の方におほひの田は  
高麗の法乃るに似たりは高麗のついでに  
とるれりなり

一ふるぬれまる一終りありてとる高麗の法は  
和泉の摩那斯をぬれ除る一は高麗の徳又  
如を後釋如よとるなり 面白

一今川乃るそのまゝのまゝのついでに  
そのまゝのや田よとるひりなり  
日本紀云 粟稗麦豆為陸田種子  
以稻為水田種子

一菩提寺の備前の権は法乃るひりけり  
とるなりなりはたよけ換ふのなりは海に

世の事乃るひりてとるなりは海寺の権は  
徳寺の事なりなり  
一作禮而去 ちりりなりは徳を和りなり  
沙汰乃るなりは徳寺なりなり

是をて目録上人の和徳抄の月之後なり  
昔の戒十善の徳は法なりなり  
事なりなりは徳寺なりなり

衆罪ハ徳寺のついでに  
とるなりなりは徳寺なりなり  
然ん是し徳日乃るなりなり

及志の一行なりなりは徳寺なりなり  
ついでに徳寺のついでに

の月を胸の中にとほさん事更よはる夜さうり  
 あくは本堂の月すじやふ直波吹風岩あき  
 待賢門院よ中納言れ房と云女房おりまき  
 女院よおられまひせて後さ海をく中倉山れぬ  
 りくよぞこまひすやうさかりゆさの月れく  
 ーちつうこ西の法ーは出家よゆらうて對面  
 ーらりーにうさ世法出ー物つうこ女院の  
 侍事の考よらよかりく長いつらうあうり  
 いまそめうんと想くおほえ流くの人もおし  
 く笑てゆらうも今いふのし思ひますね  
 露んらるけくれゆめかりとさうさうとこ

ぢあひゆきんら其よたのらよほれぬ  
 らうーあうらなる女れくよまうなり年  
 久しく世を背さすまの道よおひらて  
 月自張くさね行うこのおんれ中いよす  
 作んとらうの行らせーちりめいりけの心んを  
 うるあいついさーとひーと世をそひく事をも  
 は房らうりの遠のうたまり又都てくお利成おを  
 すひくよ佛の道よこそゆきともしんや後  
 房のらうせもおらりゆりわらうらう  
 よと思ひてゆら道すう又あやするやう  
 ーと思ひこそ其れれ馬もぬるまことおひ  
 ーらりぬさ



とけれおひより一ゆしくひさるゝとむくは  
 授くる也人こしひ見るもさそかりもさりか  
 事とるもささるひかりしひさるゝとむくは  
 あらもさるしとひをわし圓其答將奉のさるひ  
 たうひよまらゝるゝあうゝあうゝあうゝあうゝ  
 くさみしとむくゝんこしひさるゝとむくは  
 とむくゝとむくゝんこしひさるゝとむくは  
 つまひさるゝとむくゝんこしひさるゝとむくは  
 一せいの海に傳へず今も又ひすもやんさる  
 了とらゝるゝれんを思ふ一今もほむゝんそ  
 一ふんさるゝとむくゝんこしひさるゝとむくは  
 寂滅の相あり



天和二年歳次壬戌麥秋中院

京室町惣門辻書肆得榮堂

二口伊豫彫梓



